

文学博士山本忠雄君の「Growth and System of the Language of Dickens」に対する授賞審査要旨

本書は十九世紀のイギリスの小説家チャールズ・ディケンズの作品について、英語の歴史的発達特に口語の発達を具体的に且つ総合的に記述しようとして試みたものである。

本書は二部より成り、第一部は、ディケンズの英語をその時期に従い、環境と社会と文化の各方面から説明し、彼の言語の伝記的記録を作ろうと試みたもので、第二部は、ディケンズの英語の構造を説き、殊に慣用法の組織に主眼を置いて之を分類排列して、その起源及び発達を明らかにしようとして努めたものである。

第一部はこれを二十章に分ち、(第一章)先ずディケンズの英語の歴史的背景を説き、十八世紀より十九世紀にうつる英語の歴史は上層階級の英語への移行行きを示すものとし、ディケンズの英語が十八世紀以後の散文及び口語の集成と見做し得ること、またヴィクトリア時代の英語の実相を変化に富んだ各層にわたつて忠実に伝えていることによつて、彼の英語を研究することは、チヨースー、シェイクスピア、スウィフトのそれと並んで、英語の発達史の一環を把握するに重要な意義を持つものであることを説く。(第二章)幼年時代の環境と婦人語の影響を述べ、愛称語・指小辞の使用の多いことを指摘する。(第三章)満五歳以上の環境は戸外が多く、相手は友達であつて遊戯的・感情的要素に代つて社会的要素が目立つてくる。(第四・五章)学校時代については算術・地理・歴史などの知識が加わると共

にそれから出た表現が増加する。この時期は児童の語彙が急激に増加する時で、著者はディケンズの伝記とその時代の社会的背景とを参照して彼の言語の成長過程を跡づけている。(第六章)学校時代が終つて十五歳の時から法律事務所所に勤め、また新聞記者として議会に出入りする。その時の経験から彼の作品には法律関係の語句が沢山に用いられ、ラテン語も多く使用される。(第七章)一方ディケンズは芝居を見たり実演したりすることが好きで、芝居から来た語句及びそれを比喩的に使つた例が多く見出される。(第八章)ディケンズは青年時代身体が弱かつたので、自身スポーツには加わらなかつたがスポーツを見るのが好きで、特にボクシングに興味を持ち、それから来た語句が他のスポーツ用語よりも圧倒的に多く見られる。(第九章)航海用語は殊に多く且つ変化に富み、彼の言語的特徴の著しいものであるが、幼時チャタムで数年送つた間にその雰囲気に触れ、後年ロンドンで退役の海軍士官や老年の水夫などと接した経験が彼の海語を豊富にしたものと思われる。(第十一章)こうして種々の実生活の経験を重ねながら一八三六年彼の最初の作品“Sketches by Boz”が世に出るが、この中には後の作品の言語の萌芽として注意すべきものを含んでいる。とりわけ重要なのはスラングとロンドン方言とで、著者はこれを意味の上から数種に分類列举している。(第十二章)ディケンズはスラングと共に、方言を用いることを好み、親しく各地を旅行してこれを蒐集し、またアメリカには二回旅行して、その間に耳にしたアメリカニズムを採入れた作品は特に注目すべきものである。(第十三章)ディケンズは学校教育こそ不完全であつたが幼時から読書を好み、シェイクスピアからテニソンに至るまで読書範囲はかなり広がつた。しかし最も多く引用しているのは、他の作家と同じく聖書とシェイクスピアであるが、彼において特に目立つのは流行歌や民謡からの引用の多いことで、著者はこの方面に特に注意し、従来その出典の明らか

でなかつたものを多数発見しているのは著者の功績というべきである。尚最近出版された「英語引用句辞典」により近代英米文学の作品中に現われた聖書とシェイクスピアからの引用句の頻度数を編纂者が調べた結果が、ディケンズ一人の作品について著者の調べた数と順序と大体同じ結果になっていること（即ち創世紀一一六、詩篇一一二に対してディケンズにおいては創世紀二〇強、詩篇二〇弱、マタイ伝二〇一、ルカ伝八一に対して五六及び一九、シェイクスピアの引用については最も多いのはハムレットで一〇八、次にマクベス七五、オセロ四九なるに対してそれぞれ四〇、二二及び九）は興味ある事実といわねばならない。（第十六章）造語法においてはディケンズ独特のものもあつて一般に採用されておるとは言えないが、彼の始めて作つてその後一般に拡がった例もないではないとして、その例を幾つか掲げている。文体上の効果を挙げるために頭韻や脚韻を使うこと、名詞の前に長たらしい文句を形容詞に使うドイツ語流の用法、それらのあるものは他の作家に影響を与えている。—ism や —ation を色々の語句につけて名詞を、—y をつけて種々の形容詞を作ることなどを指摘し、論理や優雅を犠牲にして実利的な造語法を好むことは英語の特徴であるとする。（第十七章）最後にディケンズの文章の構造は一般にソリッドであり、各部分の分節がはつきりしている。初期の作品には短文が多いがその後次第に複雑な長い文が使われるようになる。著者は一つ一つの作品につきその文章の特徴を示し実例を挙げて余す所がない。

第二部は、第一部で示された英語の体系をまとめて述べたもので、それは個々の慣用法——文法的形態からいえば一音韻から成ることもあり、一語句一文章から成ることもある——を単位として成る英語の慣用語の体系である。ディケンズの英語は慣用語に富み、人間的であり潑刺として民族と時代とをよく反映している。著者は選び出した慣用語

の実例を分類整理してディケンズの英語の系統を記録しようと努めている。即ち一、文章形慣用法（諺やそれに類した言い方が含まれる）、二、動詞形慣用法、三、副詞形慣用法、四、名詞形慣用法、五、形容詞形慣用法。こうして種々の慣用法を実例によつて調べた結果、次のような心理的又価値的な標準が有力な作用をなしていることが知られる。即ち善悪、真偽、賢愚、大小、強弱、老若、高低、古新、幸不幸、愉快不愉快、利益不利益等の如き質的な区別が慣用法の体系の根底に存し、それが回想や嗜好のような「親しみの感じ」の要素を作っているものに外ならない。

以上のように著者はディケンズの言語体系を調べる目的をもつて、彼の作品数十篇を読破し、また雑誌や書翰集など凡て彼の書いたもので手に入る限りの材料を全部渉獵して、ディケンズを中心として多数の用例を集め、これをその意味に従つて整理按排して、また多くの語句についてはその起源に遡つて探究し、従来どの辞書にも出てないものは多く用例を比較してその意義を明らかにしている。こうして一作品の言語を徹底的に研究してその背景を英國人の生活と思想とに求めて究明したことは、これ迄欧米の学者も殆んど手をつけなかつた興味ある研究で、英語の文化史的・心理学的研究に先鞭をつけたものとして推薦に値する。もとよりディケンズのような尤大な作品を残した作家の研究に當つては、たとえ数回繰返して播読したとはいえ、幾多の見落しや又時に思違ひを犯していることは已むを得ないであろう。しかし外国人として多大のハンディキャップを持ちながら、よく最善の努力を尽して英米の学者の気の付かない諸点を明らかにし得たことは著者の功績として認むべく、また英語学に対する貢献として学界を裨益するところ大なりと言うべきである。